

過去の災害に学ぶ(特別編)

津波と稲むらの火



広村を襲う安政南海地震津波(1854年)の実況図(古田庄右衛門著「安政聞録」より): 養源寺蔵

「稲むらの火」は、戦前から戦後にかけて、広く小学校の国語教科書に掲載されていましたが、インド洋津波の発生を受け、津波の知識と対応を説く「稲むらの火」が、再び脚光を浴びています。

1854年、安政南海地震津波が広村(現在の和歌山県広川町)を襲いました。実況図からは、高さ約5mの大津波が、波除石垣を乗り越えて村を襲い、背後の田んぼに浸入している様子がうかがえます。この大津波が襲った際、浜口梧陵は、暗闇の中で逃げ遅れていた村人を、収穫したばかりの稲を積み上げた「稲むら」に火を放って高台にある広八幡神社(右上の鳥居の奥)の境内に導きました。

1896年、ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)は、この浜口梧陵が稲むらに火をつけて人々を救った逸話をヒントに、日本の神の概念は諸外国のそれとは著しく異なっていることを述べた作品“A Living God”の中で、高台にある自分の家の周りがある田の稲むらに火を放って村人を導き、その命を津波から救い、神として祀られた浜口五兵衛という人物の活躍についての物語を書きました(注: 梧陵は神と祀られておらず、梧陵の家は高台ではないなど実話と異なるところもあります)。

昭和9年、地元出身の教員であった中井常蔵は、郷土の偉人を題材にしたこのラフカディオ・ハーンの“A Living God”に感動し、その真髄を小学生にもわかるよう短く凝

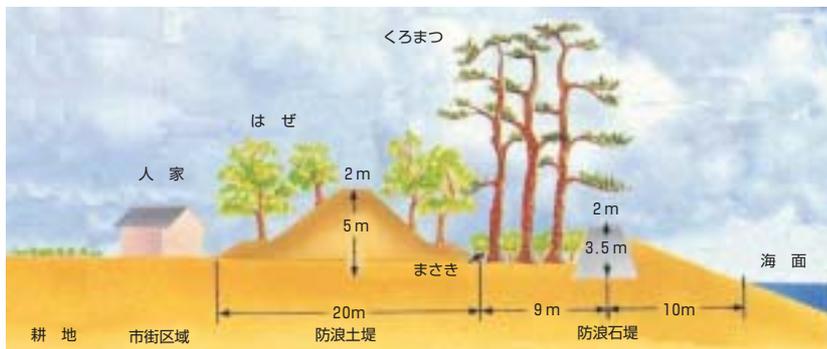
縮した作品を文部省の教材公募に応募し、入選しました。これが昭和12年から10年間、小学国語読本(5年生用)に掲載された「稲むらの火」です(15ページに原文)。

(注) なお、「稲むらの火」に書かれているように、津波は必ず引き潮から来るとは限らず、急に高い津波が襲うこともあるので、十分留意する必要があります。

さらに、浜口梧陵は、安政南海地震津波で被災後、百年後に再来するであろう津波に備え、巨額の私財を投じ、海岸に高さ約5m、長さ約600mの広村堤防(防波堤)を築き、その海側に松並木を植林しました。約4年間にわたるこの大工事に村人を雇用することで、津波で荒廃した村からの離散を防いだとのこと。

そして、安政南海地震から92年後、昭和の南海地震が発生し、高さ4~5mの大津波が広村を襲いましたが、梧陵が築いた広村堤防は、村の居住地区の大部分を津波から護ったのです。

本年1月18日、神戸で開催された国連防災世界会議において、小泉純一郎総理大臣は演説の中でこの「稲むらの火」の話を紹介し、災害についての知識や教訓を常に頭に入れておくこと、災害発生の際には迅速に判断して行動することなどの重要性を教えているとし、また、防災上のさまざまな教訓は、国際的にも共有できるものであると述べました。



広村堤防の横断図
浜口梧陵が築いた土盛の堤防(防浪土堤)と松並木(中央部分): 和歌山県提供



現在の広村堤防 写真提供: 津村建四朗氏



第十 稲むらの火

五十二

第十 稲むらの火

「これはたゞ事でない。」
 どつぶやきながら五兵衛は家から出て来た。今の地震は別に烈しいといふ程のものではなかつた。しかし長いゆつたりとしたゆれ方どうなるやうな地鳴りとは老いた五兵衛に今まで経験したことのない無意味なものであつた。

五兵衛は自分の家の庭から心配げに下の村を見下した。村では警竿を祝ふよび祭の支度で心を取られてさつきの地震には一向気がつかないものやうである。

村から海へ移した五兵衛の日は忽ちそこに波附けられてしまった。風とは反対に波が沖へくど動いて見る／＼海岸には廣い砂原や黒い岩礁が現れて来た。

「大變だ、津波がやつて来るに違ひない」と五兵衛

第十 稲むらの火

五十二

は思つた。此のまゝにしておいたら、四百の命が村もろ共一のみによられてしまふ。もう一刻も猶豫は出来ない。

「よし。」

と叫んで家にかけて込んだ五兵衛は大きな松明を神つて飛出して来た。そこには取入れるばかりになつておるたぐさんの船東が積んである。

「もつたいないがこれで村中の命が救へるのだ。」

五兵衛はいきなり其の稲むらの一つに火を移した。風にあふられて火の手がぼつと上つた。一つ

第十 稲むらの火

五十三

又一つ五兵衛は夢中で走つた。かうして自分の田のすべての稲むらに火をつけてしまふと松明を捨てた。まるで失神したやうに彼はそこに突立つた。

ま、沖の方を眺めてみた。

日はすでに没してあたりは暗く薄暗くなつて来た。稲むらの火は天をこががだん／＼薄暗くなつて来た。

山寺では此の火を見て早鐘をつき出した。

「大變だ、稲屋さんの家だ。」



第十 稲むらの火

五十三

と村の若い者は是いて山寺へかけ出した。續いて老人も、女も子供も、若者の後を追ふやうにかけ出した。

高臺から見下してある五兵衛の目にはそれが囁の歩みのやうにもどかしく思はれた。やつと二十人程の若者がかけ上つて来た。彼等はすぐ火を消しにかゝらうとする。五兵衛は大聲に言つた。

「つちやつておけ——大變だ、村中の人に來てもらふんだ。」

村中の人達は迷々集つて来た。五兵衛は後から後

から上つて来る老幼男女を一人々々救へた。集つて来た人々はもえておる稲むらと五兵衛の顔とを代る／＼見くらべた。

其の時五兵衛は力一ぱいの聲で叫んだ。

「見る、やつて来たぞ。」

たそがれの薄明かりをすかして五兵衛の指さす方を一同は見た。遠く海の端に細い暗い一筋の線が見えた。其の線は見る／＼太くなつた。廣くなつた。非常な速さで押寄せて来た。

津波だ。

第十 稲むらの火

五十七

と誰かが叫んだ。海水が絶壁のやうに目の前に迫つたと思ふと山がのしか／＼つて来たやうな重さ。百雷の一時に落ちたやうなどろろきとを以て後にぶつかつた。人々は我を忘れて後へ退びのいた。雲のやうに山寺へ突進して来た。

水煙の外は一時何物も見えなかつた。

人々は自分等



第十 稲むらの火

五十七

の村の上を荒狂つて走る白く恐ろしい海を見た。二度三度村の上を海は進み又退いた。

高臺ではしばらく何の話し聲もなかつた。一週は波にめぐり取られてあどかたもなくなつた村をたゞあきれて見下してゐた。

稲むらの火は風にあふられて又もえ上りグやみに包まれたあたりを明かした。始めて我にかへつた村人は此の火によつて救はれたのだと気がつく。無言のまま、五兵衛の前にひざまづいてしまつた。

第十 稲むらの火

五十七